
言葉にまぎれたうやむや世界。—第二部—

ランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉にまぎれたうやむや世界。―第二部―

【Nコード】

N9951A

【作者名】

ランタン

【あらすじ】

乙葉が死んだあと、由香を海藤成実に連れ去られ、達也は孤独な日々を過ごしていた。そんな中、今度は新任の副会長・佐藤伸彦が……？

プロローグ 独りの生徒会室（前書き）

第一部、楽しんでいただけたでしょうか。

第二部も、また更新を続けていきたいと思っています。なにとぞよろしくお願いいたします。

プロローグ 独りの生徒会室

私立清和学園生徒会室。

かつてこの中央にある椅子には、リラックスした乙葉が座っていた。そして、達也と由香がそれに合わせて談笑していた。もう戻ってこない、幸せだった時間。

「……」

たった1人の後輩に、全てを潰され、そして壊された。昨日、乙葉の家族と面会した。責められても良かったけれど、誰も何も言わず、ただ一言、呟いていた。

「もう……戻ってこないんですね」

その一言には、達也の感情を溢れ出させるものがあつた。けれど、本当だ。もう戻ってはこない。

「はい」

だからこそ、達也は乙葉を忘れない。海藤成実を追い、乙葉の遺志を果たす。それだけを今は考えておくしかないのだ。

生徒会室には、達也の複雑な思いがあふれている。

第一話 過去・そして今（前書き）

こんにちは。『うやむや』ここまで読んで頂いてありがとうございます。では。これからも末永く続けていきたいです。

第一話 過去・そして今

不意に肩をたたかれて、達也はびっくりとして後ろを向く。

「会長。僕ですってば」

まさかそこまで驚くとは予測していなかったと言うように、新しく副会長に任命された佐藤伸彦がくすくす笑っていた。

「佐藤……ああ、すまん」

今日付けで、もう乙葉の名前は生徒会と生徒名簿から消え、そして達也が生徒会長になり、佐藤が副会長になるのだった。それに関してはいろいろと教師の間で論議されたらしいが、結局そういうことで落ち着いたのだった。

「会長、まだ新藤先輩のこと気にしてるんですか？」

凶星ではあったけれど、今は何もいえない。本当の事など、言った所で終わらない。

「……まあ、それよりおまえも彼女の一人くらいいいなのか？ もう5時過ぎだぞ？」

「そういえばそうですね……彼女なんて、いませんしいりません。生徒会に入るってだけで結構大変だし。それに、それは僕も彼女もきつと疲れちゃいますし」

佐藤の言葉は、達也の記憶の一部分を蘇らせた。

新藤乙葉。前生徒会長で、達也と由香の親友だった男……そして、海藤成実という一人の後輩によって、悲劇の死を遂げた。乙葉にも、そういう彼女がいた。今どうしているのだろうか？

きつと、あのまま乙葉が生きていたとしても、あまり楽しい日々が続くとは限らなかったろう。生徒会は、いろいろと仕事が多い上に、仮に彼女だとしても、一緒に帰ろうと思ったら、相当待たなければいけない。先生達の手前もある。

「あいつ、すごいよな……」

思わず呟く。佐藤は不思議そうに首を傾げて達也を見ていた。

「そういえば会長、進藤先輩、まだ帰ってこないんですか？」

由香の失踪は、一応実家への帰省としてある。先生達も、普段の行いがあまり良いとはいえない由香がそういう休み方をしても何の疑問も持たなかったようだった。

「ああ、まだなんじゃねえの」

もう外は暗闇に包まれていた。

達也の瞳には、全てが蘇り、そして焼きついている。

第二話 決意・そして悟り

「なあ佐藤、おまえは……耐えられるか？」

唐突に聞いてみる。佐藤にはきつと、何のことかはわかっているはずだから。

「そんなことは、やってみないとわからない……まあ、やってみたくて引き受けたんです。だから、悔いとかそういう空っぽなものだけ残したくない。せめて、何かできることをしたい……」

きつと、それが佐藤の本音だったのだろう。副会長の件についても、あまり立候補する後輩はいなかったもので、佐藤が立候補して良かったと内心達也はほっとしていた。

「諦めるものは、たくさんあったよな……」

なんだかとても穏やかになっている。そういう時ではないけれども、とても、全てを直視できるような気分でもなかった。それは、誰もかれも同じだろう。

「そりゃあ、そうですよ。反対だって好意だって、全てを裏切らなければいけない時はきつとつくくる……僕と先輩はただそれを、待っているだけなんですから。後悔とか絶望とか、全て捨てなければいけない」

正論。

でも、だからこそ達也は悔しかった。そんなに、自分は覚悟を決めていなかった事に気づいたからだ。

だから、いつまでも自分は一步を踏み出せず、ここでもしかたなく日々を過ごして、思い出に浸って——……それは、果たして正しいことなのか？ 由香を、助ける事につながるのか。乙葉との約束を果たす事につながるのか、そして……

海藤成実に、再び巡り会えるのか。

わからない。だからこそ、やってみたい。佐藤が悟った全てが、達也をこれまで以上に追い詰めていた。自分は、こんなに無力だったのかと。

自信なんていらなくかもしれない。そんなもの、人にはもともと
いないものだったのかもしれない。少なくとも、今の自分には：
：いない。

達也は、そうして全てを悟った。

後には引かない。

第三話 後悔・そして現実

「それじゃ、僕帰りますね」

佐藤が生徒会室のドアを少し開けて達也の方に振り返った。

「ああ。遅くなって悪かった」

「いやいや、もういいんですよ。我慢しなくても」

そして、一人残された達也は、生徒会室の奥にある書庫に向かう。そこには、歴代生徒会長や校長のいろいろな機密書類があった。

乙葉に関しての書類も多数あるはずだから、それを読んでみようと思ったのだった。

すると、床に一枚の書類が落ちていた。仮にも生徒会室なので、一般の生徒が入ってきてもおかしくない。機密書類の管理は生徒会長の責任としてあるので、一般の生徒に見られるのはまずい。

「……っ」

拾おうとするといきなり風が吹いて、書類が指をかすった。鮮やかな赤色の血が書類ににじむ。

微かな痛みも感じたが、その書類の内容を見て、痛みも何もかもが頭から消えた。

『守護者受け入れについての意見』

受け入れ、ということとはやはり……学校側もこの事実を知っていたということなのだろうか。

それは、学校の最大の秘密……代々の生徒会長や校長しか知らない、ということになる。つまりは、事実を知っていたのは――……

乙葉、だ。

じゃああの『守護者』が言っていた妖怪の話も、海藤成実の一件と関連があるのだろうか。そうだとしたら、それは学校全体の危険ということになる。

海藤成実の目的が、仮に父母を生き返らせることだとしても、おかしいことがいくつか出てくる。

まず、もしたらなぜ乙葉を犠牲にしなければならなかったのか。これに関してはあまり深く知りたくもないし思い出したくもないのだが、乙葉はこの学校の生徒会長だった。そうすると、何か情報を知っていてもおかしくない。海藤成実のことも以前から知っていたようだし――……

『つやめろ！ 海藤成実の件は危険だ。今すぐ手を引いた方がいい』

まさかこんなことになるうとは達也も考えていなかったの、今は自分を責める事しかできなかった。どうしてあの時、自分は乙葉の元へ行かなかったのだろうか。どうして……乙葉を助けられなかったのだろうか。

今更だけど、乙葉に謝りたい。

遅いだろうけれど。

第四話 再会・そして焦り

「達也」

いつのことだったか、誰が言ったのか、そんなことは覚えていない。

ただ、呼ばれたから反応した。

「誰だ？」

わからなかったけど、ただ単に「気になったから」聞いた。

男か女かさえ、まともにわからなかったけれど。それでも、耳を澄まして、何とか聞こうとしている。

「あなたの全てよ」

全て、その響きに魅せられた達也は、微かに微笑む。

「俺の、全て」

全てと1つで形容できるようなものじゃなかったのかもしれない。目を離したら消えてしまうような、心細いものだったのかもしれない。それでも、傍にいたかった。いてほしかった。

「さよなら、達也」

微かで、とても強い光は、今も達也の中にある。

結局、達也は全てを失ったのだ。あの時に、全てを。

外の風はやけに冷たくて、思わず身を震わせる。

「……………」

もう誰も、達也を守ったりしない。かばったりしない。して欲しくもない。

二度とそのような思いはしなくなかった。それでもやはり時はくる。嫌でも、だ。

「先輩」

不意に声がして、達也は振り向く。

「お久しぶりですね」

姿は全く変わっていない、それは海藤成実だった。『守護者』にも「死に損ない」と軽蔑されている人ならぬ人の影を持つ、一言で言えば本当に死に損ないだ。けれど彼女の周りの空気は、なんとなく硬くなっていた。焦っているのか、それとも何かを恐れているのか。

「……何の用だ」

やはり、乙葉の一件もあってのことか、表情は自然と硬くなる。海藤成実も珍しく、表情を強張らせていた。

「先輩って意外と薄情だったんですね。一向に進藤先輩を助けに来ないから」

もちろん忘れていたわけではなく、由香をわざわざ助けに行く事を由香が拒んでいる気がしたからだ。そうでなくとも、学園を捨ててまで由香を助けに行くような事はしたくない。彼女を信頼していない事に他ならないからだ。

「それが、何か？」

無表情に達也が問う。

「また他の人を犠牲にしてしまったら、先輩はどんな顔をするんでしょうね……」

そうして、海藤成実は面白そうに微笑んだ。

さらさら相手にする気などなかったが、その名前を聞いて達也の顔色が変わった。

「佐藤伸彦とか」

第五話 恐怖・そして過去

「佐藤がどうかしたのか？」

思わず声が震える。どうしたらいいかなんてわからない。

「……前みたいなことになっても、そうやって冷静にいられるんでしょうかね……」

くすくす笑われても、あまり不快だとは思わない。

それよりも、自分の無力さがとても嫌になる。乙葉と同じように、佐藤まで巻き込んでしまう……

「佐藤を巻き込むな」

口に出したら声は震えていて、思った以上に自分は怖いのだという感覚に襲われる。

「巻き込みたくない、そう思っても遅いですよ。あなたにはまだまだ苦しんでもらう必要があるから」

海藤成実は容赦なく達也に告げる。でも、その声は微かにかすれていた。

どうしようもないのだ。止まらない。もう戻れない。

どうすればいいというんだ？ 乙葉のときのように、また俺は――

――

「つじやあどうすればいいんだよ！？」

わかっているのに、うまくいかない現実がそこにある。

誰も、触れない。止められない。

「私のところに来て下さい。丁度進藤先輩もいることだし」

海藤成実は表情を消し去って、ぽつりと呟いた。

「大切なものなんて、所詮すぐに消えてしまう」

そして、達也は意識を失った――

「愚かなものね。人間って」

暗闇の中で、海藤成実の声が響き渡る。

「……そう？ 案外使えるものかもよ」

凜としたその声は、かつて『守護者』として働いた進藤由香本人のものだった。

しかし、彼女の声は冷たく、情など抜き去ってしまったかのように冷酷だ。

「愚か……そうね。私も貴方も……よ」

海藤成実は、由香にそう言って、また暗闇の中に消えていく。

「愚かだから、守りたくなるのよ——……」

第六話 裏切り・そして記憶

「……？」

目が覚めたはずなのに、周りは暗闇で覆われていた。何も見えな
い。

「誰かいるのか？」

微かに聞こえる鼓動が、第三者の存在を明るみにしていた。

「……遠藤、なの？」

その声は、達也がずっと安否を心配していた進藤由香だった。確
かに彼女の声で、だけど……何かが違った。達也の知っている由香
の声とは何かが違う。

不意に視界が明るくなった。

「!？」

驚く達也に、由香の冷たい視線と銃口が向けられる。けっして、
正気の目ではない。しかし、油断も許されない。

「本当に、愚かなものね……」

かつての由香の面影はなく、その体はもう守護者としての責務や
名誉など関係なく、ただ己の思うままに動いていた。それはある種
人間ではないと言えるだろう。

「おまえ——進藤由香はどうした？」

達也は一瞬動揺したが、すぐに状況を見て、静かに聞く。

それは最早、目の前の相手を『進藤由香』という知り合いと合致
しないと静かに告げていた。

「何言ってるの？ 私が進藤由香よ。ずっとあんたと一緒にいてや
っただけ。馬鹿ね、信用でもしてた？ 言っとくけど、私はあんた
のことなんか嫌いだったわ」

由香はそう言ってまくしたてると達也に目をやって、鼻で笑った。達也の頭の中は、由香の言葉でいっぱいになっていた。彼女の言った全ての言葉は自分の考えていたような単純なものではなかったのだ。そして――

「おまえは……乙葉のことも裏切っていたのか？」

達也に銃を向けている今、考えられる可能性は一つだけ。

由香がもともと達也と乙葉を裏切り、守護者を裏切り、海藤成実に協力していた、そのこと。

すると、由香はすこしひるんだように表情を歪ませた。

「……そういうことになるのかしら……」

しかし彼女の表情は、完全にその答えを否定している。少し戸惑ったような、焦っているようなそんな表情は乙葉の存在に触れて困惑していた。

「……………」

彼女の気持ちは、達也にもひしひしと伝わってくる。

わかっていた。でも、気づかないふりをしていただけ。乙葉もそうだったのかもしれない。

『私は、乙葉を――』

第七話 選択・そして結論

由香は、それでも達也に向けた銃を下ろそうとはしなかった。

「……後戻りはしないと決めた。今更遅い」

その手は微かに震えていたけれど、彼女の瞳は本気だ。達也を今更庇う気などさらさらないのでだろう。

「……………」

達也もそれは理解しているが、戸惑った表情を見せることはしない。

それが結局、彼女と敵対したくないという感情の一つだということには気づいていないが。

「——なかなか面白い見ものが見れたわ」

突然海藤成実は姿を現した。しかし、その表情はセリフとは裏腹にやはり焦ったような強張ったものになっている。

「俺に何か？」

達也はその顔をじっと睨みつけた。もう何の感情もわからない。目の前の少女を人間だと、まして同じ学校の生徒だとも思いたくはなかった。

殺されたのだ。乙葉が、乙葉が、乙葉が——……

それを考えまいと思っていた。だけどそんなこと出来るわけがない。かつて副会長として精一杯彼のために出来ることはしたつもりだ。それがこんな形で不意に消えてしまった。何処か遠くへ、達也の知らない所へ乙葉は行ってしまった。

さよならさえ、言えなかった。

言いたくもなかったし、彼にはこんな事に巻き込まれて欲しくはなかったのだが。

「ぐっ……」

気づくと、由香の目の前に立っていた。

きつと無表情だろう。もう全てがわかってしまったような気がしていた。達也がどうしてこんなことに巻き込まれたのか、彼女は何者なのか、何を考えているのか――

目の前の由香と言う少女は一体何を考えているのだろうか？

乙葉への想い？ それとも達也への恨み？ 自分への葛藤……？

由香にそんな思いはさせたくなかった。少なくとも、責任など感じて欲しくはない。

「！？ おまえ、何を――」

ゆっくりとスローモーションのように、由香から奪った銃を構える。その銃口は、無論海藤成実へ。

「これ以上何もするな。何もしないのなら俺も銃を撃たない」

人道的とか、道徳とかもうどうだっていい。

これは自分が決めた道。正しいかどうかなんて誰も知らない。それでいい。

達也はゆっくりと、引き金を引いた。

第八話 涙・そして微笑み

……終わったのか？

辺りを見回してみる。

「……………！？」

そこら中に血が飛び散っていた。しかし、その先にあったものは海藤成実ではなく――……

「佐藤！？」

そんなまさか、と思いながらもそれに触れてみる。既に冷たい感触しか残っていなかった。

達也は行く場もなく立ち尽くす。

自分もう少し早く警戒していればこんなことにはならなかったのだろうか？　これ以上、海藤成実を追うのはやめたほうがいいのか？

涙が一筋、頬を伝った。

「先輩、まだ泣くのは早いですよ」

振り向くと、海藤成実が由香を連れて達也と対峙していた。佐藤の姿など見てはいない。

「つおまえ……」

睨みつけようと思ったけれど、馬鹿馬鹿しくなってやめた。今の自分は嫌になるほど無力で仕方なかったからだ。

「先輩はもうちょっと面白い悪夢を見せてくれそうだから、最後に殺してあげる」

達也の心情などおかまいなしで、海藤成実は笑いながら告げた。

「わかります？　悪夢ってとっても美しくて優美なんですよ……核

心が邪悪であろうとも」

達也は海藤成実を無視して、佐藤の頬に触れた。

大体海藤成実の仕掛けたことはわかつている。佐藤を身代わりとして達也に撃たせた……だけではなく、恐らく最初から殺していたのか。

誰も巻き込むつもりなどなかった。むしろ巻き込むまいと努力してきたつもりだ。

いつからだろう？ どうしてなんだ？ 周りが離れていく。達也の届かない場所へ、黒く深い闇へ、ずっと――

「……おまえを許そうとは絶対に思わないだろう」

達也は重い声で海藤成実に言い放つ。

海藤成実は楽しそうに、達也を見て微笑む。しかし、その瞳は笑っていない。

「私と先輩はどうやら、どう行っても味方同士ではないようですね」

達也は、ほんの一瞬微笑んだ。

「ああ……」

第九話 対峙・そして知った事

「それじゃ、私はまだまだすることがあるので」

「そうか。じゃあ俺も帰ることにする」

そう言った達也に、海藤成実は少し意外そうな顔をした。けれどすぐ表情を消し去って、何も言わずに姿を消した。

「……………」

達也は佐藤の方に体を向けて、静かに礼をした。

謝罪の意ではない。しかし、何も言わずに頭を下げてじっとする。

「……すまなかった」

今まで苦勞をかけて。こんな形で別れてしまつて。おまえの未来を潰して。

でも、だからこそ達也は後には引かない。前に進まなければならない。その決意を目の前の佐藤に捧げたのだった。

達也は顔を挙げ目を閉じて、しばらく黙る。

自分はいつまでこうしてればいいのだろうか？ 海藤成実の目的を阻止しなければならぬというのに、まだ何も出来ていない。佐藤を守ることをさえできなかった。

嫌な考えが頭をよぎる。もしかして、自分にはそのような力量はないのか？ 今だって海藤成実を引きとめたほうがよかったのか……

不安や後悔はいくらでも出てくる。そのおぞましい感覚にしばらく我を忘れた。

『海藤成実を殺せ』

『先輩はもうちょっと面白い悪夢を見せてくれそうだから、最後に殺してあげる』

『あんたなんか嫌いだったわ』

いろんな思いが交錯する中、達也は一つの感情を読み取っている。それはきつと、言葉では言い表せないような人の温もりだった。

誰もが生まれて最初に触れる、温かくそして気高いその感情は、何に傷つけられようとも決して消えることはない。

逆にいえば、『嫌い』という感情はその感情を知っている人しか言えないのだ。海藤成実が一回も言った事がない言葉。それが、彼女の異常さと事情と哀しみを物語っている。

いや、『愛』という言葉は知っているだろう。だけど、中身を知らないのだ。それはつまり、温もりの温かみを忘れてしまったという事。人間としてとても悲しいことだ。

人間としての意味を失ってしまった彼女には、最早何も通用しない。同情も何もかも。

だから達也は、また歩いていく。

第十話 現実・そして夢

起きると、自分の部屋にいた。

「……？」

周りを見回してみても、誰もいなかった。けれど少しだけほっとする。

昨日の晩、血だらけで佐藤をおぶってきた達也は疲れ果てていた。そんな姿を見た学校側は、何も言わずに達也を家に帰らせた。

達也としても、あのまま事情を聞かれるのは耐えがたかったので、言われたとおりに家に戻り、心配していた家族に謝ってから床に就いたのだった。

頭の中は何も考えられないほど空っぽになっていて、佐藤の事さえぼんやりとしか記憶していない。けれど、目的と決意を忘れたわけではない。二度とこんな思いはしたくないから。

もともと、自分がこんな事に巻き込まれるような非凡な高校生だとは思っていなかった。いや、今も認めたくはない。こんな事を言ったら笑われるかもしれないが、死ぬならせめてヒーローのようにカッコいい死に方をしたい。もちろん、自分の命を輕輕しく思っているわけではない。

もうわかってているのだ。生きるか死ぬか、それがこの戦いの結末。海藤成実もそれぐらいの覚悟はしているはずだ。仮にも2人も人を犠牲にしているのだから。

墮落した人生とか、そういう人生のことを長々と語る趣味はないが、それでも達也にはやらなければいけないことがある。そんなことは百も承知だ。しかし多分今からでも決意を変えるのは遅くないだろう。

けれど駄目だ。

分かっているから、後戻りはしない。

何度も振り返って確かめようとしたけれど、戻るといふ選択肢は存在しなかった。

達也の望んでいた答えはどこにもなくて、そこにはただ嘲笑うように乙葉と佐藤と由香の面影があるだけだった。

達也はゆっくりとベッドから起き上がると、制服に着替えた。
こんなことくらいで全てを諦めたくはない。

第十一話 意志・そしてその瞳

「どうしたんだね？ 君には今日は休んでいいと言ったはずだが」職員室に入ると、学年主任の先生が厳しい顔をして達也に静かに聞いた。

「用があるんです」

達也は静かに言い返した。職員室全体の視線が達也に集まっていたが、達也は気にならない。

それよりも焦っていたのだ。誰にもわからなかったかもしれないが、今すぐ何か対策をうたないとこの学校はすぐに海藤成実によって壊される。しかし、そんなことを教師に訴えるわけにもいかず、達也はこうして職員室で海藤成実についての情報をもらえないかと思っただけだった。

「言っておくが、これ以上訳の分からない事にうちの生徒を巻き込まないでくれたまえ」

先生の声は冷ややかで尖っていた。

確かに、その言い分は正しいだろう。訳のわからない理由で死んでしまった生徒。家族への詫びも一言では足りない。その上、二人とも生徒会の人物だったとくれば、もう何となく察しはつく――……「お願いします、海藤成実という女子について教えてください！」

生徒会長として、一人の人間として、自分の評価が下がっていくのを達也は知っている。

けれど、そんな微々たる事で諦めているようなときではないのだ。譲ってはいけない。誰にも、これは邪魔させてはいけない……ゲームや遊びとは訳が違うのだ。

先生達も海藤成実が関与していることは知っているようで、目をそらしたり俯いたりする先生が多数だったが、達也は目をそらさず、ずっと状況を見ていた。

「……どうします？」

「仕方ない。やはり、最後は生徒会長として片をつけてもらわなくてはな」

「しかし、もうこれ以上は……」

先生がひそひそと言い合ううちに、だんだん学校の風が強くなってきたような気がした。

「……………」

気のせいなのか？ いや、それにしてもまるで誘われているような感じがする。

「遠藤君、じゃあわかった。海藤についての書類を渡すからその代わり、もうこれ以上他の犠牲は出さないでくれ。約束してくれるな？」

「はい。わかりました」

達也は書類を受け取ってから、生徒会室へ急いだ。

第十二話 忠告・そして実情

誰もいない生徒会室。

当たり前だ。自分が犠牲にしたことがそのまま返ってきているだけだから……

乙葉も佐藤も由香も、確かに自分が一瞬の隙を見せたからこそ持っていた。幸せとかそういう感情さえ、何もかもが消え失せるあの瞬間。

自分が責任を感じたとか、そういう安っぽい言葉では終わらせたくないものだった。だから今まで何を言われようと耐えられたのだ。だけど、もうそれが自分の中で儚く燃え尽きていた。これ以上どうしろというんだ。俺があいつを殺したら良いって？ そうすれば全てが終わるんだろう。だけど、俺はそうはいかない。どうしてだよ。どうして乙葉が死ななきゃならなかったんだよ。

「遅いな」

「誰だ？」

達也が顔を向けると、そこにはぞつとするような冷たい笑みを浮かべた長身の青年が立っていた。

「おまえじゃ海藤成実には届かないさ。まあすぐにわかることだけだ」

「どういうことだ……？」

青年は何も言わず、ただじつと達也を見据える。思わず達也は目をそらした。

「海藤成実は、俺の妹だ」

達也は背筋が冷たくなるのを感じた。外見は全く似ていないのに、持っている雰囲気のことなく同じ物のように感じたからだ。

「……だから何だ」

「俺はあいつを援護する気はさらさらないし、あいつを捕まえようとも思っていない。ただな、あいつが余計な事をしてくれた場合は即座に殺す。はは、あんたは殺さないよ、楽しそうだしね。とにかく俺は事態を收拾するためだけにここにいる。あんたがどうにかしてくれたらそれでいい」

一気に喋り終えた後、青年は達也に一言告げた。

「あんたはどうやら運が悪いようだ。これからあいつがおまえに屈服する事はまずありえないからな」

第十二話 忠告・そして実情（後書き）

最近更新していなかったのは気まぐれではなく、私の存在が薄くなる事を待っていたのです。そう、だからけっして気まぐれではなく

……

更新ペースもまちまちですが頑張ります。

第十三話 記憶・そして現在

『海藤成実、女。16歳。家族構成——叔父、叔母。成績、授業態度共に問題なし。……………』

いくら読んでも、それしかわからなかった。書類と一口で言ったところで、当然生徒に渡す書類などたかが知れている。ただ、家族構成については少しだけ思うところがあつた。両親はともかく、兄のことには一切触れられていない。どうやら、教師達はあの男の存在を知らないらしかった。

こんな情報だけで、彼女を出しぬけることなどできない。むしろ、自分が死ぬか。でも、この学校に何かがあるのは確かなのだから、探っていればやがて何か出てくるはず。そう思つてずっと探しているのだが。

「ふう……」

力を抜いて、椅子の背もたれに体を預けた。そもそも、何があつた？ 乙葉が死んで、わけのわからないまま、由香を連れていかれて、『守護者』と話して——佐藤が死んで、海藤成実と再会して。由香はどうしているんだろうか。海藤成実の家にとして、誰か不審に思わないはずがない。そういうのじゃない、そういうのじゃない。

『あの計画は私にしかできない』

『汝、汝は生きるものであり、同時に死すものである』

『ああ、これは人間の抜け殻みたいなものです』

海堂成実——死ねないものへの鎮魂歌。

計画は止めなければならぬ。そう、だから自分は今ここにいて、資料を読んだりしてどうにか糸口を見つけようとしている。が、何

も思い出せない。

「!」

「『汝、汝は生きるものであり、同時に死すものである』」

海堂成実の家にあった本。一ページだけ黄ばんでいたから、何か変だと思っていた。どういう意味なのか考えもしなかったが、今大體のことが繋がった気がした。

「っこれもし本当なら」

急がなければならない。直ちに。

海堂成実の、家に。

第十四話 疑問・そして追憶

そう、最初から解せないことがあった。いくつかあるが、まず一番引つかかるのが海堂成実の家にあった本。他にも、回りくどい方法や、抜け殻のこと、連れて行かれる前の進藤の腕の傷、乙葉や佐藤の不自然な死に方。数えきれないくらいある。ただ、手がかりはあの本の一ページにあると思う。

あの言葉が指しているのは、『生きていて、死んでいるもの』つまり、『体か心、どちらかが生きていて、もう片方は死んでいるもの』だ。心だけ生きている者には守護者いがい心当たりはないから、おそらく指しているのは校長達の抜け殻——思い出すのもおぞましいが。

そして、死ねないものへの鎮魂歌。

「あいつは、最初からこのつもりだった……？」

だとしたら、乙葉がなぜそれを知っていたのか。あれだけ止めようとしていたのは、それなりの理由があったはずだが……。理由に関わっているものについてはさっき挙げたものしか推測できなかった。

ただ、少なくともこの学校には不安定な要素がいろいろある。『守護者』が言っていたようなことも調べてみる必要があるかもしれない。いずれにせよ、やることは山ほどあって、海藤成実と対峙できるのは、ずっとずっと後のことになるだろう。誰もいない生徒会室で、ふっとため息をついた。するといきなり痛烈な眠気が襲ってきて、ボールペンを取り落とした。

その瞬間、一年位前にも同じようなことがあったことに気づいた。

——乙葉と出会った時のことだった。

第十五話 追憶・そして喪失

新学期といっても、中高一貫であるこの学校に通っていると感慨もなかった。高校生になって、変わったことと言えば学年とクラス、それから校舎くらいだ。クラスメイトの半分くらいは顔と名前が一致しているし、知らない奴に声をかける『冒険』を試してみようとも思わない。教室の片隅でそんなことを考えながら、達也はふと窓から校庭を見た。

中高一貫校だけあって、中学と高校の校舎はそれぞれ大きく、真ん中にある校庭も狭くはない。外では多くの中学生が遊んでいた。高校生になると、中にこもる奴が多くなる。達也も、そうだった。

顔見知りはたくさんいたし、話す相手に不自由することはなかった。唯一不満だったのは、実感がわかなかったこと——高校生になった、これからの期待とか明るい希望が感じられないこと、だった。何となく、筆箱に入っていた短い鉛筆の端に『大吉』『中吉』『吉』『末吉』『凶』『大凶』の六つをシャーペンで書いてみた。転がしてみると、勢いが強すぎたのか、机から落ちてしまった。達也はどちらかという、鉛筆の芯が折れていないかの方が気になった。

拾おうとした達也の手より先に、別の手がその鉛筆をつかんだ。

「……？」

「はい、面白そうなことやってんな」

その人物は、おそらく学年全員知っているであろう生徒会副会長——新藤乙葉だった。かなり気さくな人柄とは聞いていたが、今はあまり話す気分じゃなかった。

「……別に、気にしないでくれ」

生徒会なんかと関わりたくはなかったし、あえて言えば気味悪かった。あの時既に、ちらほらと変な噂は耳に入っていた。その中に

は『守護者』の噂もあった。

「なあ、遠藤君」

高校生にもなると、同級生に対して君づけする男も珍しくなる。

その時はかなり気持ち悪く思っ、て、鳥肌が立ったのを覚えているし。

「何？」

「今日、放課後空いてる？」

やることはなかったし、帰ったってつまらないことばかりだら。そういう理由で受けたのもあるのだが、やはり一番には今この会話を打ち切りたいという切実で純粋な願いからだった。

多分、放課後の誘いを受けなかったら何も知ることにはなかっただろう。でも、それは命の危険がない代わりにとってもつまらないことのように思えた。

エピローグ 彼女の思惑

ずっと、ずっと前。まだ、この学校の異常さには気付いていなかった時のこと。

「……進藤先輩」

呼びかけた先輩の背中へは、私のか細い声に反応することなく、ぱたぱたと廊下を走って行った。多分、生徒会室へ行くのだろう。追いかけてようとした私の足が、止まった。ひやりとした冷たい何かが、私とすれ違ったような気がしたのだ。とても気持ち悪くて、なかなかそこから体が動かなかった。

背中を汗が伝い、ひどく嫌な予感がする。

「あ……」

そして、その予感本当のものになる。最悪の形で。

「何で私だけ、ここに連れてきたの？」

もう自我を取り戻した進藤先輩が私に尋ねた。やはり、『守護者』としての素質はもとより、その精神力には敬服する。私は、彼女にだけは全て話してもいいような気がした。でも、私の独断で話してしまっただけは、『彼ら』は許してはくれない――。

「端的に言うと、あなたは今回の事には関わってほしくなかったからです」

それは本心だった。彼女に関わってもらっては困る。ただ、その理由を話すのはまだ駄目だけれど。

「どうしてよ？」

「……………」

答えられるわけがなかった。彼女は私のことなんか覚えてない。理由を話したとしても、すぐには信じてもらえないだろうし、気味

悪がられるかもしれない。何も起こらなくても、いずれ自分はこの学校から去るつもりだが。ならば、何を話したって関係ないだろう。そうだ、もう全て話したとしても、誰も怒らないのだから。

「今起こっていることは、この学校で代々賛否両論を呼んできた儀式を行おうとしたことが発端です。遠藤先輩が気づいたかどうかはわかりませんが、新藤先輩は最初から知っていた。だから、止めようと思いましたね、ご存じのように」

本当はそれだけではない。しかし、あえてそれを今言うべきではないことくらいはわかっている。教えなければいけないのは、その儀式の内容。

おぞましい、長年秘密にされてきた学校の秘密だった。口に出したら、『彼ら』は嫌でも動き始める。自分がそう仕向けたから。そして、先輩も薄々勘付いているはず。私は、失敗してはいけない。この計画は私一人の犠牲で賄えるほど単純なものではないのだ。

——まさか、あいつが手助けしたりはしないだろうし。

海藤成実は、もう思い出したくもない男を思いながら、心から楽しそうに笑った。

エピソード 彼女の思惑（後書き）

中途半端な所で終わりましたが、次回で完結です。
読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9951a/>

言葉にまぎれたうやむや世界。―第二部―

2010年10月8日15時52分発行